

【随想・交換留学を終えて】
馬頭琴の音色

清泉女学院大学一年 長崎 玲奈

2007年9月30日、長野市中央通りの広場で「It's Small World」きて、みて、ふれて、世界を知ろう」という国際交流イベントが開かれた。そこで私は、雨の降る中、初めて馬頭琴の音を聴いた。あのモンゴルの草原が目に見え、去る9月3日、私は大学で募集していたモンゴル研修旅行に参加し、ある遊牧民の家庭で3日間のホームステイを体験した。そして、初めてモンゴルの草原で風を纏まらせた。



モンゴルの草原は、ただただ広がった。遠くを見れば丘がある。あとは、遊牧民の暮らすゲルと家畜のヤギやヒツジ、そして馬。何も無いと言えそうなのだから、

うが、私にはそれが嬉しかった。ゲルから離れ、一人でボツンと草原に立つ。風を感じ、太陽の陽を感じる。そして目を閉じ、風の音を聴く。なぜ、あんなに満たされた気持ちになったのだろう。



ガイドさんに案内され初めてゲルの中に入る。大量の馬乳酒で歓迎された。お世話になった家族には、小さな女の子がいた。彼女は、私を怖がることなく近くに寄ってきた。そして、私の手をとりゲルの外へ連れ出した。そして、私に話しかける。何を言っているのか分からない。困ったような顔をしている私を見て、彼女は笑っていた。そして、手を引いて子ヤギのいるところへ連れて行ってくれた。その子ヤギは生まれたばかりで、群れと一緒に放牧すると置いてかれ、迷子になっていた。彼女は、子ヤギを自慢げに抱え上げた。そして、優しく子ヤギを撫でていた。

遊牧民の家族はみんな優しくかった。彼

等はモンゴル語しか話せず、私はモンゴル語を知らない。けれど、みんなといると楽しかった。笑顔が溢れていた。馬乳酒で歓迎され、食事を一緒に取り、ゲルの外で遊び、馬に乗り、放牧してあるヤギやヒツジの家へ戻すの手伝ったり、馬乳酒作りを手伝ったり、ゲルの中で音楽をかけみんなで踊ったり、ウオッカで盛り上がりたりした。言葉は分からないが、彼らの表情や声、心づかいから彼らの優しさを肌で触れるように感じた。それは、彼ら遊牧民の厳しい生活の中から生まれてくる優しさと強さであろう。

衣・食・住全てを自然に頼る彼ら遊牧民。決して裕福ではない彼らだが、貧しいからこそ、自然が厳しいからこそ、人々と常に分かち合う精神を大切にしている。そんな伝統が今もモンゴルには残っている。私は、このホームステイで「分かち合う精神」を手渡されたように受けてきた。温かい歓迎に始まり、別れの時には名残惜しさを持ったままバスに乗り込み、いつまでも手を振る彼らに見送られた。私があんなに満たされた気持ちになったのは、まるで命の中に立っているような、命に包まれているような、そんな感覚だった。草原に生きる遊牧民を優しく、そして強く育てる世界、モンゴルの草原が私をそんな気持ちにさせた。9月に長野で聞いた馬頭琴の音色は、あの広いモンゴルの草原を思い出させた。それは、風の中を走る馬たちを、遊牧民の強さを、温かい優しさを、「また、会いましょう。」と言った家族の顔と彼らの思いを、私の胸の中に浮かび上がらせたのだ。

連携・交流・組織化を支援します

長野県中小企業団体中央会

会長 星沢 哲也

〒380-0936 長野市中部所字岡田131-10
長野県中小企業指導センター4F
TEL026-228-1171(代) FAX026-228-1184
ホームページ <http://www.alps.or.jp/>
メールアドレス chuokai@alps.or.jp

「進取創造・終生学習」を理念に、広範多岐にわたる先取的事業を展開する経営者集団

社団法人 長野県経営者協会

会長 安川 英昭

〒380-0838 長野市県町584
TEL026-235-3522 FAX026-234-0667
[HP] <http://www.nea.or.jp>